

---

# ラブカクテルス その32

風雷人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラブカクテルス その32

### 【NZコード】

N1362D

### 【作者名】

風雷人

### 【あらすじ】

今宵はどこにでもありそうで、なきそなうなカクテルを作りしています。「賞味あれ。

いらっしゃいます。  
どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットファイズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？  
はたまた、大人の香りのマティニー？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は吊革田誌で「ジゼー」です。

「ジゼー」といってください。

私は駆け込んだ。

間に合わない、つと間に合つた。セーフ。

わかつてはいるが止められない。

これが毎日、朝の始まりのスリル。

今年に入つてからは、276戦中、251勝13敗12引き分け。  
ちなみに引き分けとは、駆け込みにならなかつた回数だ。

それくらい私は、朝のスリルのために時間の調整に余念がないのだ。

しかし、やつぱりこのギリギリセーフだった時の、周りからの視線  
は格別だ。

走つたせいで心臓がバクバク鳴つている上に、この視線で余計に心  
臓は高鳴る。

まるで初恋の時のようにだ。

私が女だから余計に男からの視線が刺さるのが刺激的だった。  
しかし、触られるのは嫌いだ。

あくまでもこのギリギリ感がいいのだった。

しかし今日も電車は空いている。

とはいっても、席は満席だが。

私が乗る駅は始発なのでやたらめつたちは混まない。  
二つ先の駅からは混むが、私の降りる駅は四つ目だから、そんなに  
苦労はしない。

馴染みの三両目の真ん中のドア、登り線側の進行方向を背中にして  
より掛かるのが私のいつもの場所。

なぜならそのすぐ後ろの席には、今日も私好みのイケメン君が座つ  
ているからだつた。

おはよう。イケメン君。今日も元気？

私は決まって心の中で挨拶を交わすのだった。  
だが、この頃は気になつてゐるイケメンがもう一人いるのだった。  
彼を見かけ始めたのは夏の終わり辺りからだつた。

色黒で男らしい一枚目だつた。

茶髪がまたよく似合つていて素敵だつた。

確かに初代イケメンはインテリくさくて、真面目そうな感じだ。  
そこが顔立ちの良さとマッチして、まさに私の理想のインテリジュ  
ントパークだ。

ちなみに意味はよくわかつていなゝが。

でもやはり、野生的なあたましさは捨てがたいのだった。

困る。ほんつとうに困る。

あまり朝から私を困らせないでほしい。  
でも、やはりいないと淋しい。

女心は複雑なのだ。

そういうしている内に電車は私の降る駅に着いてしまつた。

私は後ろ髪惹かれるおもいで、仕方なく下車したのだった。

私は営業でも電車に乗った。

大概は一人なので、その時は駆け込みアタックをしてみるが、成功率は低い。

時間の確認がなかなかできるほど暇ではないからだ。  
だから大体のケースはノーカンだった。

私にはステータスがあった。

どんなに長い時間電車に乗る羽目になつても座らないことだった。  
休日は免除だが、平日は必ず実行していた。

私は立つて揺られていることが運動不足の体にはとても役に立つ気がするのだった。

何しろ事務所では座りっぱなし。  
家に居ても座つてることがほとんど。

それではオシリが分厚くなつて、垂れてしまつ。

私の前の前の前の彼氏が、私のオシリはかわいいと褒めてくれた。  
それ以来、私は自分のオシリを大事にして、かわいがつているのだ。  
そのトレーニングには電車で立つてているというのは、もつてこいな事に思えてならないのだった。

座るなんてもつたいたいもつたいたい。

それに、昔から引っ込み思案な私が、学生の頃に腰掛けっていた席の前に足の不自由な老人が立つていて、席を譲るその一言が言えず、氣まずい雰囲気と後悔の念が頭から離れずにいた事を、しばらく抱え込んだことがあった。

始まりはその事からの後遺症からだったのかも知れない。  
譲るくらいなら座るな、である。

だから私の特等席はドア際だった。

そして、周りを堂々と見て眺められるのも、こここの特権でもあった。

大体は皆窓の外の景色を見るが、私が見ているのは車内だ。

私にとっては景色よりよっぽど車内は楽しいのだった。

まあでも、この時間帯ときたら、退屈な時のほうが多いのだが。

私は吊し広告に目をやるフリをして、車内の様子をチラ見した。昼寝をしているバー・コードさんや、トンチンカンに着飾つたおば様方、子供連れの若い奥様、そして頭の先から足の先までグレーにしか見えない使い走りの若手サラリーマン。

私もそのグレーの中の一部かも知れない。

自動扉の横にある手摺を握る手に、思わず力が入ってしまった。

電車の中とはいえ、やはり仕事中の私には、さすがにときめき Bieberも役に立たずため息だけが電車の中でこもる。

きっとそれがグレーに見える原因なのかも知れない。

帰りの景色は一通りだ。

真っ直ぐ帰る電車と、飲んで帰る電車。  
どちらも独特だ。

直帰りの時の車内は、まず騒がしい。

壁にデカデカと書かれているのに、必ず我慢できずに電話を取るやつ。

今電車の中、うん、うん、そう、電車の中、うん、うん、そう、そう、いや、いや、電車の中だからと、まさに切りたいのだけど、話相手が切ってくれなくて、みたいに電話してる人や、その電話の話声を聞き消すくらいの勢いで話をしてる女生。

乗つてから、ずっと電話をいじくってる人や、かわいいランドセルを重そうに担いで、政治の話をしてる小学校。

仕事の愚痴を言い合ひ窓際さんたちや、ベタベタで糸を引いてる力ップルさん達。

様々な会話が私の耳へと入っては抜け、入っては抜け。

それが面白そーか、テレビのチャンネルを変えるみたいに聞き入つ

てみたりする。

大概是下らない話しだが、それでも暇つぶしにはなるのだ。

そんな方に耳がいついていても、目は独立した別の生き物のように吊し広告を見たり、変わった事をしている人や、イケメンを探してさまよう。

まるでハイエナ。

視線という口を開けてヨダレを垂らしている。

それと、たまに思いつくのが、知り合い探し。

なかなか帰りの電車は時間がアバウトなせいで朝の時間帯と訳が違う。

乗り合うメンバーも様々だ。

だから特徴が濃い人などにマークをして、また会える確率を測るのだ。

マークなんて大袈裟に言つけど、実はあだ名だ。

それだけに特徴が必要なのだ。

だが、未だにまだ、私が名付け親になつた知り合いや、本当の意味での知り合いも、電車であつたことはなかつた。

そんな事で少し落ち込む時は、ため息が漏れないように少し代わり映えない外の景色を見て落ち着くのだった。

私は最終電車にはたまにお世話になる方だ。

電車の車内も好きだが、お酒も好きだからである。

特に酔つ払つて乗る電車は格別だつた。

たまにシラフで中途半端な時間に乗ると、その臭いにやられそうになるが、それはそれでお互い様。仕方ないと諦めるしかない。止めてくれなんて当然言えないからだ。

それにしても最終電車の込みようは、夏の湘南海岸を思わせる。まさに芋洗い、いや、芋の酒蒸しと言つたところか。

ただ、メンバーは不揃いでも、黄色い話し声もしないし、電話で喋つてゐる人も滅多にいない。

朝のラッシュ時に似ている。

私はそんな中、決まってする事がある。

吊り革占いである。

自分が今いるところから、いくつ捕まられている吊り革があるか？

それを数えて、それが偶数であれば、今夜はよく眠れて、いい夢を見れる。

しかし、もしそれが奇数ならば、嫌な夢にうなされる。と、自分で作った占いだ。

いきなり太った夢や、駆け込んだ電車の扉に腕を挟まれて全速力で走らされる夢。

朝のイケメン君に睨まれて嫌われる夢。

だから、私は何気なく数え始めた吊り革が、ある程度までくると、必ず偶数で止まるように探しまわる。

だつていい夢見たいんだもん。

私にとって最高の夢。

それは電車の中でぐつすり眠りながら、ガタンゴトンと揺られる夢。どこまでもどこまでも。いつまでもいつまでも。

お密さん、お密さん、終点ですよ。

しかし、この人、よく立ったまま熟睡できるなー。

本当に電車に乗つてくる人の中には変わった人が多い。困つたものだ。

お密さん起きてくださいよー。

どこまでも。いつまでも。

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げております。では。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1362d/>

---

ラブカクテルス その32

2010年12月13日19時31分発行